

人形劇グループ「あおむし」とともに

盛田 悦子 昭和八（一九三三）年生まれ 野火止在住

光成 雅子 昭和八（一九三三）年生まれ 野火止在住

川口 悦子 昭和一一（一九三六）年生まれ 北野在住

公民館の講座から

盛田 人形劇への関心は高校生の頃からありました。ちょうど高校演劇が盛んな時代で、多少かじっていました。その後、劇団に所属したこともありましたが、子どもが生まれてからは、住んでいた朝霞の親子劇場で、人形劇グループをつくって、子どもたちと遊んだりしていました。

新座に越してきたのは昭和五四（一九七九）年の八月ですが、九月の市の広報

に、中央公民館で人形劇の講座があると載っていました。尊敬していた加藤暁子先生の講座だったこともあり、すぐに申し込みました。

光成 新座に来たのは昭和四八（一九七三）年ごろです。幼稚園の教諭をしていたので、人形をつくって子どもたちと遊んでいました。

人形劇を観せると、子どもの反応が何ともいえずかわいい。私はしゃべるのが下手だけど、人形を持てば人形にしゃべ

らせることができる。私よりもずっと人形には力がある。そう気がついて、人形劇にのめりこんでいました。

川口 私も演劇が好きで、学芸会では張り切って舞台に立ったりしていました。

新座に来てからは、新座団地のお母さんたちが始めた「パンダルーム」で保育の仕事をしていたので、市の広報で講座があるというのを見て、子どもたちに観せてあげられたらいいなと思って参加しました。先生もいいし、楽しくてやめら

れなくなつて今まで続いています。

盛田 加藤先生の講座で『アブラハム・ダンス』を習つて、もっと続けたくなり、お願いして二回目を開いていただきました。『とんだあおむし』『さるかにむかし』を教えていただいて、初めて中央公民館で発表しました。グループをつくることにして、名前はみんな「あおむし」に決めました。将来、蝶々になるからつて。一〇人ぐらいのメンバーでした。

大井教雄先生の『体操オリンピック』がやりたいと、昭和六〇（一九八五）年、公民館に三回目の講座を開いてもらい、大井先生に来ていただきました。これらの演目は現在もやっています。

川口 中央公民館長の小木曾さんが最初に加藤先生を呼んでくださったのがよかった。この第一回目の講座から数えて、昨年（平成二二年）が、ちょうど三〇年。いまだに加藤先生とはお付き合いが続いています。

光成 講座に参加したおかげで、いい友達、いい先生に出会えて続いているんだ。

す。ただ、私は、プロのような人形劇団になりたいとは思っていません。普通のお母さんが子どもに話すような、素人っぽさをたいせつにしたいと思っています。

公演の依頼を受けて

川口 昭和六〇年に大井先生の『体操オリンピック』の講座を受けて、三月に公民館祭りで上演し、大井先生にも観ていただきました。子どもたちの前で公演したのはこれが最初です。

光成 それを観て、小学校、保育園、幼稚園、児童センター、子ども会など、あちこちから依頼が来るようになりました。川口 九月には「人形劇団グループ」の主催で、東京近辺の人形劇グループが集まる「第三回お母さん大会」に初めて参加して、「さるかに」を演じました。

昭和六〇年から平成一一年までの記録があります。一五年で一四八回、だいたい年に一〇回くらい公演しています。今も、そのくらいですね。

盛田 公演はもつとしてきたような気がするけど…。

光成 すぐできる演目は一〇ぐらい。そのほかにちよつと練習すればできる、ストックされているのが一〇ぐらいあります。これは、お母さん劇団としては大きな財産だと思います。

川口 せつかく完成させてもだめになっちゃう出し物もあります。やつぱり台本です。いい台本じゃないと、いくら人形が良くても、子どもたちは喜びません。「さるかに」なんかは、やればやるほど良くなります。

盛田 お話から自分たちで脚本をつくったり、付け足して長いものにした。川口さんが書いた台本もあります。

人形も背景も自分たちで

光成 人形は自分たちでつくります。

盛田 『アブラハム・ダンス』『さるかにむかし』ばなし』『体操オリンピック』とも最初のメンバーがつくった人形が今も活躍しているんです。ボロツちくなつて、つくり直そうという話もありますが、私はそのままがいいと反対しています。発泡スチロールで顔の形をつくり、紙

粘土でつくった鼻、耳をつけて…。

光成 その上に和紙を貼って、絵の具で目や鼻や口を描いて、髪の毛をつけ、洋服を着せて、最後は「命を吹き込む」。

盛田 自分のつかう人形は自分でつくるのが基本です。バックを描いたり小道具をつくったりは、上手な人がやってくれますけど。

川口 最初の頃、画家の丸田記久さんが入っていて、「さるかに」の背景をつくってくださった。

盛田 『ヘンゼルとグレーテル』も丸田さんです。

光成 私は人形をつかうより人形をつくるほうが好きなんです。

盛田 光成さんのつくる人形は、普通の人がつくる人形と表情が違います。『ヘンゼルとグレーテル』の魔女とか、『ジャックと豆の木』の肉屋さんとか、『三枚のお札』の婆とか、すごい人形が新作ごとに必ずあるんです。大事な人形は光成さんにお願ひしています。

光成 魔法使いの鼻の横にイボを付けたり、かわいいおばあさんに眼鏡をつけた

り。みんなに言われて、だんだん完成していくのが楽しい。プロの人でも「素晴らしい！」と言う人形を、「あおむし」は持っているんですよ。

盛田 音づくりも自分たちでやっていきます。身近にいる方に頼んだり、あれがいい、これがいいと工夫したり、持ち寄ったり。

三〇年続いた理由

盛田 人形劇は、やることも楽しいし、子どもたちとの交流も楽しい。もう生活の一部です。

川口 幕の内と外とに分かれていても、子どもたちの声は聞こえてくる。楽しんでいる声が響いてくると…。

光成 すごく嬉しい。それで続けられる。

盛田 それに、メンバーがよかった。人形づくりの上手な人がいるし、絵描きさんがいるし、大工さんがいるし…。いいものができたから、みんなが観てくれた。それが励みになって、一人ひとりが教わりながら、研究しながら、だんだん磨きがかかってきた。

川口 うん。でも、それよりも何よりも、私たち仲がいいのよね。けんかもするけど。

光成 何でも言いたいことを言う。聞く方も真摯に受け止めて聞く。傷つくけれど、自分のために言ってくれたと思わなくちゃ。それで長く続いたと思う。

盛田 心の広い人がたくさんいた。

川口 言われても、いいものをつくるためだから、言ってもらったほうがいい、とみんな思っていると思う。だから言われても、もう平気。

盛田 「あおむし」のメンバー〇人のうち私たち三人が最初からのメンバーです。

最初の頃は仕事をもっていたりして来られない方もいましたが、最近はお主人の病気とか介護とか、自分の怪我とかが休む理由ですよね。いつ自分の身に来るのか、という感じ。いちばん若い人で五八歳ですから。

「あおむし」の舞台は、「けこみ」といって、人の隠れる高さが、普通は八〇センチくらいなのに、一三〇センチと高いんです。それで、中腰の無理な姿勢ではな

く、立って動ける。からだに無理のかからないのも長続きの理由の一つかと思っています。

川口 なるべく一役を二人ができるようにしていますが、代役、代役で大変です。でも、普段からみんながやるのを見ているから、急にやることになっても、何とか乗り越えられます。

盛田 声の質も問題になります。意地悪な声とか、お姫様の声とか、犬の声とか、それぞれ得意があるんだけど、子どもの声は…。子役はやれても、どうしても声の張りが違う。

川口 少年の役、『ジャックと豆の木』のジャックなんかは一番若い人に決まってしまう。

光成 私たちより若い世代の「ラ・ペ」に、新座の人形劇の将来は任せたい。

昭和五九（一九八四）年に野火止公民館から「人形劇のサークルをつくるから手伝いに来て」と言われて何人かで行ったのが、「ラ・ペ」との出会いです。初めは手袋でつくる人形劇で、手伝ったり教えたりして、そのまま私が残って、代表

をずっと務めました。こちらも二八年になります。今は若い人が引き継いでいます。

人形劇フェスティバル

盛田 中央公民館の「人形劇フェスティバル」が、私たちの公演活動の一つの柱になっているわね。

川口 人形劇フェスティバルは平成五（一九九三）年が第一回で、インフルエンザが流行った一昨年は中止だったので、今年で一八回目です。

盛田 板橋区の人形フェスティバルを観にいつて、新座でも四市でやろうと、朝霞、志木、和光、それに十文字女子大、跡見学園の人形劇団に声をかけたのが最初です。中央公民館の社会教育主事をしていた内田さんが力を入れてくれましたね。

川口 今は新座と朝霞の劇団で続けていて、今年は新座から「あおむし」「ラ・ペ」「ふろしき座」が参加します。栗原公民館の「どんぐりっこ」も、今年はお休みですが、ずっと参加しています。朝霞から

は「たんぼぼ」がずっと参加していて、毎年、いい作品を観せてくれます。

中央公民館で、音楽室では一、二歳からでも観られるもの、レクリエーション室では幼稚園から小学校低学年向けと、二つに分かれて公演します。

盛田 子どもたちとその親で、いつも二〇〇〜三〇〇人は来てくださる。私たちが続けてきたことの力になっています。今年も、ぜひ成功させたいですね。

野火止公民館の建て替え

盛田 今、気になっているのが野火止公民館の建て替え。新しい場所に建て替えられて、念願だった小ホールが併設されるのは嬉しいんですが、そこに荷物を置くスペースを用意してもらえるかどうか、ということですね。

光成 市内で公演活動をしている文化団体が集まって、小さい舞台のある会館をつくってほしいと、市に請願を出したこともありました。でも、せっかくなつくっていただけたことになったのに、私たちには会を続けられるかどうかの問題にな

ってしまいました。

盛田 人形劇は荷物がすごく多いんです。舞台は、間口が二メートル五〇、高さが一メートル三〇、そのほかにソデが一メートルほど両脇に来ます。幕だけでも、かなりの量です。「ラ・ペ」さんと二団体で、野火止公民館の倉庫はいっぱい。新しい公民館には倉庫に使える部屋は全くないと聞いている。そうすると、もう人形劇はできなくなります。

「出使い」といって、舞台をつくらずに、人形を持って前に出てやる方法もあって、一つ二つは出し物がありますが、いつも同じものでいくわけにはいかないし。一人か二人で小さなテーブルの上でやる「テーブル劇場」という方法もありますけど……。

光成 ちっちゃい子は人形が出たら人形しか見ていません。そのくらい人形に集中させる力があれば、それでもいいんです。でも、台本からつくりなおしになるし、愛着のある道具を捨てなければならぬ。

川口 倉庫を借りるのは大変だし、稽古

のときには倉庫から出して自動車で運ばなければならぬ。公演のときはお母さんたちが運んでくださるからいいけれど、お稽古のときには運べません。

盛田 新しい公民館に倉庫ができて、スペースを用意してもらえばいいんですけど、それがなければ「あおむし」は解散しなければならぬんじゃないかしら。川口 図書館のクリスマス会には、「ラ・ペ」さんと交代で、毎年、公演しています。福祉の里の児童センターなど、市の行事にも、よく公演を頼まれているんですね。

語りと読み聞かせの世界

盛田 川口さんは、「まめの会」で「語り」もやっていますね。

川口 「まめの会」を始めたのは人形劇の五年くらいあとですから、もう二五年くらいになります。江古田にある「東京子ども図書館」で素話（すばなし）を学んだ方が志木にいらして、その方について、「語り」の勉強を始めたんです。パンダルームで子どもたちに聞かせたいと思

って。

この勉強会に参加した新座の人たちで「にいざまめの会」をつくって、東北コミセンで図書を貸し出す日にお話をするようになりました。絵本の読み聞かせをしている『ハメルーンの笛』や、紙芝居をしている「だんごの会」と、それぞれ一か月に一度でした。

でも、図書の貸し出しが東北コミセンから「ほつとぶらざ」に移ると、借りに来るのは赤ちゃんを連れたお母さんが多くなつて……。今「ほつとぶらざ」では、乳幼児向けに、絵本の読み聞かせや紙芝居、手遊びなどをしています。

中央図書館の「おたのしみ会」でもお話をしてきましたが、そのメンバーを増やしたいと思って、図書館のボランティアの集まりで声をかけさせてもらったら、二〇人余りの方が手を挙げてくださって、ようやく新座にもお話の勉強会をつくることができました。

月に一回の集まりですが、みんな積極的に昔話などを覚えてきて、仲間の前で語りはじめています。いずれ図書館や学

校でどんどん語れるようになるのではないかと楽しみにしています。

盛田 三〇代から六〇代くらいまでの方たちですね。

川口 子どもは、お話に引きつけられると、その世界に入っちゃうんです。絵本の読み聞かせは絵の助けがあつて、それはそれでいいんですけど、素話はまた別で、車に乗っていても、寝る時でも、すぐその場でお話ししてあげられるでしょ。本がなくても、どこでもできるのね。それもいいなと思つて、素話は自分の楽しみでやっています。

人形劇はグループでやるもので、私はみんなでやるのがすごくいいと思うの。舞台があつて、台詞もあるし、役もあるし、音楽もあるし…。素話は一人でやる、それもいいな、と思つています。

盛田 私も最初は「まめの会」ですが、その後は「朗読の会ひびき」で、ずっと勉強させてもらってきました。「ひびき」は、できてから二二年になりますが、原爆の悲劇を母と子の手記でつづった朗読劇『この子たちの夏』を一七回、上演して

きました。

去年からは新座の民話を紙芝居にしています。瀧島浩二さんに一六話の原画を描いていただいて、それを普通の四倍くらいの大きさの紙芝居にして観ていただいています。学校や高齢者の施設で喜ばれて、昨日もおとといもやつてきました。

「まめの会」で「語り」を勉強したことが、朗読や紙芝居で生きているんです。勉強してよかつたと思つています。人形劇は人形劇で、それなりの楽しみなり勉強なりがあるし…。いろいろと好きなことができて、恵まれていますね。

私にとっての人形劇

川口 私には、まず生きがいですね。仲間と一緒にやるからこそ楽しくできるし、それに、行かなければと思うから、元気でいなければならないし、子どもたちに観てもらふことで元気をもらえるし。

仲間と会えるから、お互いにいろいろな悩みを聞いてもらつたりすることもあつたりして、社会への貢献というよりも、自分のために、やつてきてよかつたな、

と思つてますね。

盛田 私の場合も、振り返ってみますと、自分のなかで、心とか気持ちとかがずっと続いていたんですね。言葉で言うところ「生きがい」かもしれないけど、昔のまま「あーそうだ！これがなきや私じゃない」そういう気持ちもありますね。「私、これがなかつたら私でなくなっちゃう」、ゼロになるような…。今考えれば宝物ですね。この気持ちが続いていたというのは。

環境がよかつたとは言えないと思うんです。普通に生活していますから、女の人がぶつかる問題はいくらでもあつたわけだし…。でも、自分を貫けたことは、今思うと幸せだつたと思います。何を排しても先に持ってきた。家庭をおろそかにしている部分がありますけど、優先するものは自分の活動だなと。

光成 公演は日曜とか土曜ですから、夫をおいて出かける…。

川口 もちろん夫の協力がなければ、できなかつたと思います。光成さんのご主人さんはご自分を「メンバーの一人だ」

と、よくおっしゃるんですけど。

光成 おばあちゃんの人形を家に置いていたら、いつのまにか眼鏡をかけていたことがあります。

川口 車で荷物を運んでくださったたり、雨の日の送り迎えとか、そういう家族の協力があつて、続けてきたんです。

盛田 続けられたということがすごいですね。でも、私の場合、何となく毎日やっていたら続けていたんですけど。

（聞き取り 平成二三年一月）

（新しい野火止公民館「ふるさと新座館」にも、荷物を保管するスペースをつくっていただきました）



女性の声を議会につなげる

太田 博子

昭和一〇（一九三五）年生まれ
新座在住

「満州」で敗戦を迎える

私は一九四一（昭和一六）年五月、当時の国民学校一年生の途中で、父の転勤に伴い「満州国」錦州市に赴き、五年生で敗戦を迎え、その翌年に日本に引き揚げてきました。その頃の体験が私の原点の一つになっていると思います。

錦州の社宅（東綿紡織株式会社）では、日本内地では珍しかったガス、檜の角風呂がある立派な家に住んでいました。しかし、中国人はレンガを積んだ壁と土を固めた土間で、片隅にオンドルがあるだけという粗末な家に住み、わらの浮いた

井戸から水をくんでいて、その落差にすごいショックを受けました。私たちは、日本人だけの国民学校に通い、徹底した軍国主義の教育を受けました。戦争が激しくなると、教師たちはどんどん召集され、女学生も竹やりの訓練をしていました。

国民学校の生徒は、石油の代用品になるというヒマシ油をつくるためのヒマの木を植えようとスコップで穴を掘りまわりました。そのうち学校は兵舎になって、私たちは、校舎の外の材木の上で先生の話を聞いたり、予科練の歌を歌いながら歩いて自然観察をするといった状態でし

た。

敗戦の翌日には、「日本は負けたのではありません。休戦です」と校庭で訓話を受けましたが、その翌日から学校に行くことはなくなりました。

それまで威張っていた日本人は、敗戦になると急に態度が変わりました。ソ連軍が引き揚げて、八路軍と蒋介石軍の内戦になりましたが、それぞれの軍隊が来るたびに、その軍隊の旗を、どこからか入手して掲げる姿を見て、「なーんだ。日本人もだらないんだ」と、不信感が湧いてきました。

父は敗戦の前日に召集され、ソ連軍の

捕虜となつて強制労働に従事させられましたが、逃亡して帰宅、一家はかろうじて翌年五月二三日に博多に着き、浜松の母の実家を頼りました。

父は帰国して半年後に亡くなりました。母は、当時の女性にしては珍しく専門学校を出ていたので、新制中学の教師の職を得て、私たちを育ててくれました。

大学で歴史を学ぶ

新憲法を知つて、これからは、戦争をしない道があることを知りました。また、基本的人権や思想信条・言論の自由、結婚は男性と女性双方の合意に基づくといった条項にも、驚くと同時に希望、光を見た思いがしました。私は人から、「あなたは、何について、すぐに憲法、憲法と言う」と言われますが、このときの思いが、私のもうひとつの原点だと思います。

大学は、お金がかからないように寄宿舎のある国立大学を選び、お茶の水女子大学の史学科に入りました。高校時代に歴史に興味を持ったからです。中国から

の引き揚げで一年遅れ、中学・高校で結核を病み三年休学したため、四年遅れの入学でした。

なぜ両親が旧満州に出向いて、日本の中国侵略の一端にいたのかが、私にとって長年のこだわりでした。しかし、大学から帰省するときに持ち帰った遠山茂樹の『昭和史』を読んだ母が、「こんなことを知っていたら満州なんか行くんじゃないかった」と言うのを聞いたとき、当時の日本の庶民は日本や世界の状況を知ることができなかったのだと理解し、思想信条・言論の自由が奪われていた歴史を繰り返してはならないとの思いが、時を経るに従つて強くなりました。

三年生になったとき、あの虐げられてきた中国が、なぜ革命をなしたのかを知りたいとの思いから、東洋史を専攻しました。また、お茶大で初めて社会問題研究会をつくり、同時に、学生自治会の執行部に入りました。六〇年安保闘争のさなかでした。

六〇年安保闘争のなかで

このときの経験は私の転換点でした。

陳腐に思われた講義やゼミは適当にサボり、学生運動にのめり込みました。日米安保条約の改定案を国会に持ち込ませまいと、自治会執行部で学生大会を開いて全学ストライキを提案。全学ストを実現させ、日比谷野外音楽堂での集会とデモに参加したりしました。しかし、反安保闘争は実を結ばずに終わりました。

当時の学生運動のなかには、考え方の相違からいろいろなグループがあり、切り崩しにあつたりするなかで、目的のためには手段を選ばないやり方に我慢できなくなりました。また、私は、当時の時代背景もあつて「日本の変革」を目指していましたが、これは学生運動だけでは実現できません。

かといつて、安保闘争のなかで見た労働運動は「あと少しで国会突入」というときでも、動員で参加した組合員のデモ隊は「われ関せず」とばかりにUターンしてしまう。このような労働運動ではダメだと思ひ込んでいました。

私は卒論に打ち込みました。恋愛も経験しました。これは勉強には鬼門でした。何しろ時間とエネルギーを消費させるものでしたから。そして、学生運動にも労働運動にも失望した私は、これから社会を変えていけるのは、自立した個人が支える市民運動かと、ずっと考え続けていました。

「奥さん」と呼ばれる暮らし

学部を卒業し、結婚生活をおくりながら修士課程を修了した後、高校の非常勤講師をしました。そのうちに自分の意思を受け継いでくれる人が欲しくなり、子どもをもうけて家庭に入りました。子育てと仕事の両立は最初からあきらめました。

その後の五、六年、夫の職場の関係で、国家公務員の宿舎で暮らしました。それまで個人として生きていたのに、公務員宿舎ではお互いに「奥さん」と呼び合う関係でした。また、公僕であるにもかかわらず届け物があり、それが多いことを誇りにするような宿舎の雰囲気は憤懣(ふ

んまん)やるかたなく、打ち解けて話せる友達もできずに過ごしていました。

そうしたなか、新聞の広告欄に新座団地の入居者募集の記事を見つけたのです。埼玉なら、浦和に市民運動を展開している小澤遼子さんがいる。自分で市民運動がつけられなかったらそこに加わっていくのもよいと考えました。

新座団地の住民運動

一九七〇(昭和四五)年一〇月、「将棋会を地域でつくりたい」という夫の夢と、「市民運動ができる」という私の夢が合致し、借金をして、あこがれの新座団地にはいりました。

しかし、入居してみると、ここで生活するには、さまざまな問題があることがわかりました。北足立郡新座町大字大和田字大正という地名でしたから、いろいろあるだろうかと、想像はしていました。

九月から一一月にかけて入居してきた住民たちは、一二月に「新座団地を住みよくする会」、翌年二月には「自治会準備

会」をつくって運動を始めました。その先頭に立ったのが、子どもを連れたりおんぶしたりした女性たちで、私もそのなかにいました。

問題の一つがごみ処理です。団地に接して新座市・志木市・富士見市が共同で運営するごみ焼却炉がありましたが、ゴミの急増に追われて火事になってしまい、処理しきれない生ごみが傍らの柳瀬川の河川敷に放置されていました。

そのため、団地入居とともにハエの大量が襲ってききましたし、柳瀬川の向こう岸では、お隣の三芳町の家庭ごみが古タイヤとともに野焼きされていました。

住民は新座市と交渉して、ごみ焼却場の脇に野積みされた四〇〇〇トンのごみを撤去させ、また、三芳町の役場に七〇人が座り込んで、翌日、野焼きの中止を約束させました。また、後になります、志木地区衛生組合の焼却場の炉に電気集塵機をつけさせました。

保育園の増設と時間延長

もう一つ、お母さんたちが困っていた

のは保育所です。「保育所付き団地」というふれこみに誘われて、子育て中の女性がたくさん入居したにもかかわらず、団地に保育所は一か所しかなく、団地外の保育園もいつも満員でした。また、八時半から四時までしか預からないので、東京に働きに行く人たちはとても困っていました。

そこで、住民は保育所の増設や保育時間延長の運動を始めました。一九七二（昭和四六）年二月には、大雪のなかをタクシーに分乗して福祉事務所長を訪ね、七項目を掲げて直談判しました。しかし、陳情をしても抗議しても、行政はまったく動きません。

土曜日は午前中しか預からないので、市役所出張所に予定されていたスペースを借りて、午後は自分たちで保育したりしました。また、住民の家に「たけのこはいくえん」を開設して、市に無認可保育園への補助金制度や市立保育園の設立を求めました。これらは、後になってですが実現して、私立保育園の園長たちに感謝され、また市立保育園の増設につな

がっていきました。

新しく転入してきた、いわゆる「新住民」の急増にどう対応するかは新座市全体の問題でしたが、新座団地は二〇〇〇世帯がまとまって「新住民のコミュニティ」が成立しつつあっただけに、これらの運動が旧来の「農村型行政」にあたえたインパクトは大きかったと思います。

公害問題・環境問題から保育所問題と、三時間ぐらいしか眠らない状態が二年ぐらい続きました。でも、子どもを何とかしなければいけないと、みんな必死で、すごい運動ができたと思います。

保育問題から市議に

新座団地では、公務員宿舎とは違って、ほとんどの主婦が働いていました。東京に勤めに出ている人もいるし、そうでなくとも新聞配達や牛乳配達、チラシまきなどをやっていて、「すごい！」と感激しました。彼女たちは一人ひとりが自立して運動していました。私は女性たちをフルネームで呼び、これらの運動に全力でかかわるなかで、素晴らしい仲間と出会

いました。素晴らしい仲間がいたのががんばることができたのです。

私はここで、人との付き合い方、運動の進め方など、多くのことを学びました。そして、決して突っ走るのではなく、みんな考えて力を合わせて運動をつくっていくやり方を追体験していました。学生運動のなかで持ちはじめていた姿勢でした。

保育所に続いて、学童保育も母親たちの切実な要求でした。しかし、「つくってほしい」と市に請願しても、まったく応えてもらえません。そんなときに「議員をやってみないか」と声をかけられました。

当時、私は住民運動の力で行政や市を動かしてこうと考えていて、選挙で代表者を選び、その人を通して政治を動かすという間接民主主義はあまり評価していませんでした。しかし、学童保育がニッチもサツチもいなくなっていて、陳情も通らないし、「仕方がない、固く閉まった扉をちよつとでも開けられたら」と真剣に議員になることを考えはじめました。

みんなに相談して、市川房枝さんに推薦人になっていただきたいと事務所にお願ひに行ったところ、引き受けてくださいました。友人宅を昼間、選挙事務所に開放してもらい、ポスターをつくって、急きよ、選挙運動を始めました。

「新住民」のなかから、しかも主婦が出るのが当時は珍しく、期待する人も多かったと思います。革新無所属で、母親の代表として「新座母親党」と名乗りました。

女性だということとは有利だったと思います。どの候補者に投票すればいいかわからない人たちがたくさんいて、「女性の代表が出たらいい」と思っていた「女性だから書きましたよ」などと言われました。カンパを募って、選挙公報とポスターを活用するお金のかからない選挙運動で、一九七二（昭和四七）年二月に当選しました。私が新座では二人目の女性議員でした。

住民とともにたたかう

市議になって、すごかったです。今ま

では市役所に何回言いに行っても、主婦の意見など差別されて通らなかったことが、提案すればどんどん通っていききました。

例えば、それまでは保育園の入園選考に、職場で働く女性の実態などをまったく知らない高齢の民生委員が当たっていました。専門職のソーシャルワーカーを導入して実態を調査し、「保育に欠ける」順を見極めるべきだと発言したら、それが通りました。

また、学童保育所もつくられるようになりました。学童保育は厚生省にもまだ政策がなく、全国的にも苦しい運動でした。「埼玉学童保育連絡協議会」をつくって県知事と交渉し、畑知事から三分の一の補助を取り付け、市が三分の二を出して、新座でも公設民営で始めることができました。

新座市の第一次基本構想の策定にもかかわることができました。人口が一九万五千になるとの見通しのもとで、若い職員がどんどん入ってきて、新しい息吹を感じました。すばらしい職員が増えたあ

のときが本当によかったなと思います。私が議員をした一四年（一九七二〜八六年）の間に、新座団地には、たくさん

の住民運動が育っていききました。保育については、一九七一年に団地の集会所で三歳児を対象にした「パンダルーム」が発足していましたが、七三年、柳瀬川の河畔に市がプレハブの学童保育所と柔道場を建てたので、学童保育を父母が運営し、パンダルームは柔道場を利用できるようになりました。

八〇年には、障がいをもつ人たちが、養護学校の教員をしている人を中心に「地域でともに」と、「キャベツの会」を立ち上げ、八二年、自然食品店「よろずや」を開設しました。障がいをもつ人が店番をして、地域の人々との交流の場になっています。

消費者運動のなかから

消費者運動も、七〇年代末頃から、自治会の消費対策部として活発に活動してきました。地球環境にできるだけ負担をかけない生活を心がけるとともに、講演

会などを開いて、広く市民に呼びかけました。また、有機農業でがんばる農家と手を結び、野菜、果物、豚肉などを共同購入し、「よろずや」も、この活動のなかから生まれました。学校給食では、食器をポリプロピレンからアルミに変えさせました。

私が三期目だったとき、給食を各学校で調理する自校方式から、センターで一括して調理し、各学校に運ぶ「センター化」が打ち出されました。これに対して母親を中心に大きな反対運動が起こり、市内のほとんどの学校区からセンター化に反対する陳情が出されました。

私たちは「スモール・イズ・ビューティフル」というスローガンをつくり、大量生産・大量消費・大量廃棄のシンボルとしてのセンター化に反対して、市内のPTAなどに働きかけました。

市は計画を撤回しました。母親たちの必死の運動が実ったのです。私は、このときこそ「議員をしていて本当によかった」と思いました。私が議員として入手できる限りの情報を母親たちに渡してき

たことが役立ったのですから。

自衛隊反対を訴え続けてきました。台湾を、朝鮮憲法九条に関しては、朝霞の自衛隊基地で行われる観閲式に、小さなデモを組織して、半島を、そして旧満州を植民地化してきて敗戦を経験し、もう紛争の解決に武力を用いないとした歴史を忘れてはならないの思いからです。

そのほかにも、住民運動のあるところにはすぐに飛んで行って、新座の街じゅうを軽自動車で走りまわりました。夜中の三時まで会議をして、翌日の九時には議会に行くようなたたかいの毎日でした。

革新無所属の議員として

議会では、女性だからといって差別されたことはありませんし、特に不利益な扱いをされたこともありません。一人だけの革新無所属なので、二九対一というときもありましたが、議会の「会議規則」に議員は平等であることがうたわれていましたので、それが頼りでした。

ただ、議員同士の嫌がらせなのか、学童保育をめぐる「不穏当な発言があつ

た」と、徹夜の懲罰議会を経験したことはあります。そのときは、学童保育の仲間が傍聴につめかけてくれました。

私は常に市民自治を貫こうと思っていました。それには議会をオープンにしなければならぬので、本会議だけでなく、委員会や全員協議会などを市民が自由に傍聴できるようにしようと主張すると、賛成してくれる会派もあつて、その方向に進んだこともあります。

その頃、全国で革新無所属の議員が増えはじめていて、「革新議員会議」ができましたので、第一回から参加してきました。そういうところで勉強して、元気をもらって自分で政策を考え続けました。

私は、住民の生活に具体的に関係する情報を議会で得ると、すぐに、「こういうよ」、「みんなで立ち上がって」と市民に伝えに行きました。でも、うまくいったことばかりではありません。これは危ないと感じたとき、問題を市民にいち早く投げかけて、なんとか知恵を出してもらいたい、立ち上がってもらいたいと思つても、そうはならないこともありました。

私自身の力の足りなさを感じたときもあつて、政治は結果責任ですから悔いの残るところもあります。

四期目を迎えるとき、女性議員を増やしたいと考えました。給食のセンター化に反対する運動のなかから、消費者運動や環境保護に志をもつ、若くて信念のあるすばらしい女性が出てきました。「みずの会」という政治団体をつくり、私と彼女と候補者を二人立てて「票割り」をし、みごと二人とも当選しました。

充実していた日々だったか…

四期の半ばで県議選に出て市議会議員を辞めました。三期が適当と思っていましてし、ふつと、このまま続けていいのかなと思うこともあったりして、交代する一つの手段として県議選に出ることにしたのです。

議員だったときには、それまでのように子どもに目をかけられず、不安定な思いをさせました。

消費者運動として、有機野菜の共同購入や豚の一頭買いなどもしていたので、

既製品を使う料理はせず、でも手はかけられず、ろくな食事は食べさせられなかったと、すまない気持ちでいます。

自衛隊観閲式の反対運動で、私の留守中に自宅に右翼らしき人から電話があつたりして、子どもにいやな思いをさせたこともあります。

いま振り返ると、絶えず新しい課題が出てきて、市民とともに活動しながら自分でも勉強し続けなければならぬ、大変だけれども充実していた日々でした。

（聞き取り 平成二三年十一月）



情熱を燃やしたスポーツ振興

遠藤 梯子

昭和一一（一九三六）年生まれ
東在住

スポーツが大好きで

私が生まれたのは、長野県の更科という町です。中学生の時に東京の板橋に移り、新座市には、昭和四〇（一九六五）年、二〇代の終わりに引越してきました。

私は、子どもの頃からスポーツが大好きで、中学校ではバレーボールをやっていました。昔のことですから九人制で、きちんとしたコートもなく、コンクリートの上でやっていました。三年生の時にキャプテンになったんですが、顧問の先生とちよつとトラブルがあつて。そう

したら、バスケットボール部、当時は籠球部と言っていましたけど、そのバスケット部の友達から、来ないかと誘われたんですね。それで顧問の先生に「バレー部は辞めます」と言ったら、本当は、先生が止めてくれると思つたんですけど「そうですか」って。引つ込みがつかなくなつて、バスケット部に入つたんです。

その後、高校を卒業して実業団のチームに入っていたんですが、監督が交代したら、バスケットボールに対する考え方の違いというか、方針というか、そういったのがちよつと違つて、私も頑固ですから、思い切つて辞めてしまつたんです。

その後も、日本体育大学に入り、バスケットボールを続けることになりました。実業団から大学へ、普通とは逆のコースになつてしまいましたけど、実業団や大学時代の恩師・友人とは、強い絆みtainなものがあつて、関係は今でも続いているんです。

体育指導委員になつて

新座市に引越してきた年に、縁あつて、市の体育指導委員をすることになりました。私のスポーツの経歴を関係者が知っていたのでしよね。

体育指導委員は、市や教育委員会のス

ポーツ教室などで指導員としていろいろ協力をするんですが、公民館で体操教室を立ち上げたりなんかしました。当時の体育指導委員は四〇名くらいいましたけど、女性は一、三人くらいだったかな。

市民体育祭の準備も体育指導員がするんですが、私はいつも先頭に立って動いていましたね。たばこを吸ってサボっている男性陣に「たばこなんか吸ってないで、そこにあるバケツ早く持って来て!」と注意したら、教育委員会の偉い人たちが、なんてこともありました。責任感が強すぎると、いつも言われています。

バスケットボールを通じて

その後、新座第二中学校の先生からバスケット部のコーチを依頼されたんです。当時は外部コーチなんていう言葉もない時代で、中学校の部活で先生以外の女性がコーチをするっていうのも、あまりなかったんじゃないでしょうか。でも、子どもたちの熱心な活動の様子を見て、自分ができることならと思って、指導することにしました。

中学校で生徒たちとバスケットボールを通じて過ごしているうちに、自分の中で、新座市の中学校全体のバスケットボールをもっと盛んにしたい、バスケットボールを通じてたくさん子どもたちにいろいろなことを学んでほしい、そんな気持ち湧き出てきたんですね。そのためにはどうすればいいか考えたんですが、やっぱり、中学生になる前、小学生のときからバスケットボールに親しんで、好きになってもらおう、そう思ったんです。当時新座市には、ミニバスケットボールのチームは、片山地区に二つありましたが、大和田地区には一つもなかったんです。それで、大和田地区にもチームを作って、たくさん小学生にバスケットボールを知ってもらい、楽しんでもらう、そして中学校でバスケットボールの技術を磨いて活躍してもらおうと、そんなことを考えたわけです。

体育館にミニバスのリングを

でも、小学生がミニバスをやるにはいろいろな問題があったんです。その一つ

がコート環境の問題でした。

今、どこの小学校の体育館にも、ミニバスのリングがあるでしょう。あれも当時の新座ではほとんどなかったんです。小学校の授業では、バスケットではなくポートボールをやっていたので、リングは必要なかったのですね。

それで、これではいけないと思って、教育委員会と掛け合って、「リングを付けてほしい」というお願いをしました。当時の市長の家にも押しかけました。既にある体育館に後から付けるので、軽くて可動式のものでないとダメなのです。川口市にあるリングを作っている会社にも直接行って頼んだりしました。

そのかいもあって、それからだんだんと学校単位でリングを付けてくれるようになったんです。ほんとによかったと思います。

組織の役員として

その後、朝霞地区ミニバス連盟を立ち上げて、会長になりました。新座のチームもだんだんに増えて、今は一三チーム

あります。新座市は、県下でも有数のバスケの盛んな市になったと思います。

その間、私は新座市バスケットボール連盟の会長や財団法人化した体育協会の最初の副会長なども務めました。

当時の体育協会の役員はほとんどが男性で、女性が会長とか副会長というのはなかったように思います。

男が主流のスポーツの世界でしたけれど、女の私でも会長や副会長を務めることができたのは、責任感が人一倍強かったこと、周りの方の温かい協力があつたこと、それとやっぱり一番の理由は、未来のある子どもたちのために、自分できるところを一生懸命がんばろうっていう強い意志をいつも持っていたからだと思います。

小学生や中学生のスポーツって、今も昔も、勝利至上主義みたいな考えが一部にあるんです。でも、私は、スポーツを通じて、感謝の気持ちや挨拶とか、他人を思いやる心とか、そういった道徳をきちんと学んでほしいと願っているんです。今、いろんな世代でスポーツ人口がす

ごく増えていますよね。それはそれで嬉しいことなんですけど、保護者や指導者のモラルというか、意識がとても低くなっているところがあるような気がします。

親が指導者に過剰な接待をしたり、逆に指導者がそれを求めたり、体罰や汚い言葉を使ったりとか、そういう話を聞くとかよつと悲しくなりますね。子どもたちの純粋な心を大人が汚してはいけなと思うんです。

私はもう引退して、直接指導の場に立つことはなくなりましたけれど、これからもかげながら、新座の子どもたちの成長と活躍をずっと見守っていききたいと思っています。

（聞き取り 平成二三年三月）

